郷土はんのう

第21号

◆視界を広げよう（坂口和子）・・・・・・・ 2頁

◆郷土史の疑問点解明へ（吉田　靖）・・2頁

◆吾野村の郡域復旧（金子仙太郎）・・・3頁

◆小瀬戸郷土史考（野口正元）・・・・・・ 4頁

◆飯能地方鉄道開設の頃（新井五助）・・6頁

◆飯能の歴史おもしろ問答・・・・・・・・2～6頁

◆随筆　輝いた鳥居（大野悦子）・・・・・・7頁

◆郷土史研だより・郷土館だより・・・・・・・8頁

視界を広げよう

坂口和子

昨年の夏、栃木県足利市の絵馬研究家O氏から丁重なお便りをいただいた。平成九年教育委員会発行の「飯能の絵馬ー描かれた祈りー」にのっている絵師についてのお尋ねだった。足利市の調査では、葛飾北斎の高弟昇亭北寿がかいた絵馬が最近発見されて脚光を浴びているという。その昇亭北寿と歌川国貞の高弟歌川貞国の名前が入間郡の絵師のなかに見えるか、その絵馬はどこにあるのか、飯能は江戸に近いこともあって文化水準がたかいのでしょうと添えてあった。

早速絵馬調査を担当された金子仙太郎さんに連絡し調べてみることにした。O氏の言う有名絵師は飯能の絵馬にはなかったが、お隣の入間市に歌川貞国の絵馬があるのを知った。年が明けて久保稲荷神社をお訪ねした。天保十三年銘大絵馬は、江戸庶民の正月風俗を細かく描写した見事な筆遣いで、江戸後期の歌川系の画風が漂っている。

偶然絵師に対する興味が湧き飯能の絵馬をもう一度見なおすきっかけになったのである。

他地域の郷土史や資料に関心をもつことによって新らしい発見があることは事実である。地続きの郷土史という物の見方を広げていきたいと思っている。

郷土史の疑問点解明へ

二十一世紀への期待

吉田靖

わが飯能郷土史研究会はここ何年か、幕末の武州世直し一揆（いっき）発祥の地である名栗村を訪れる会とか、飯能市岩淵の農民も加わった宝暦田安領一揆の勉強会とか、秩父事件の決起の地吉田町を訪れたりと、一揆関係について学ぶことが多かった。これは「郷土史研究会」としては当然の、というか、避けて通れない歴史の一頁なのだが、それにしても疑問点の甚だ多いのに困惑させられる。

たとえば、よく知られる明治維新の二年前に飯能河原を出発点として発生した武州打ち壊し一揆にしてからが、多くの研究者が何十冊となく書いているのに、参加人員はむろんのこと、指導者が名栗村の二僧であったのかどうかさえまちまち。

ある書は「理論的、精神的中心となったのは下名栗の竜泉寺の住職など二僧であった」としており、またある書は二僧説を否定的に捉えている。近年になり否定説が濃厚になりつつあるといえ、そのどちらにも決定的な裏付けがない、というのが現状。

近年、飯能・日高地方で注目されるようになった天明の高麗郡一橋領一揆に至っては、「一揆そのものが無かった」とする説さえ出ている。しかも年と共に「無かった」説が大きな流れになってきたように思われる。

たった百五十年前後のことでさえこの状態それだけに郷土史研が取り組むべき課題は山住していると言える。

武州一揆の「指導者二僧説」は「世直し大明神」の幟を押し立てて参加者に誇りを持たせ、世間的には一揆の正当性をもPRする効果も考えられての戦略、これほどの知識は名栗の百姓や成木の灰惣だけでは考えられなかったのではないかと、当時書かれた一揆関係の古文書を裏付けとして取り上げている。

一方「二僧否定説」は事件鎮圧後、関係者の処分が発表されたが、そのなかに二僧の名がない事実、寺にそうした資料が残されていないことなどを根拠としている。さて、事実はどうなったのであるうか。

天明三年の浅間山噴火の年に発生したと伝えられている高麗郡一橋一揆も疑問点が多く、今もって一揆が本当に発生したのか。それとも発生した事実は無かったのか、どちらとも断言できない、というのが現状らしいのである。

この一橋領一揆は日高市内の横手村、久保村、台村や飯能市内の赤沢村、唐竹村、直竹村、上下畑村など十七ヵ村、千二百人もの百姓が結集し、検地の武士たちを吊しあげたという事件。

事件の発生をきしたものとしてはただ一つ、高麗本郷の名主かそれに匹敵する立場の文筆の達者が書き残したと見られる。

『天明三発卯年秋一橋御領知郷村騒動記』がある。これは高麗本郷の旧家堀口家に現存しているので、これを根拠に『神編・埼玉県史』（資料編・近世2騒擾・一九八一年刊行）がやや詳しく解説している。また『高麗郷土史会編』でも取り上げられている。

これについて研究家の間では「一揆という場合、少なくとも三つや四つの見聞記録といったものが近隣の名主とか僧、医師などの知識層によって書き残されているはず。しかし高麗一揆だけは他に文書が発見されておらず、伝承もない。『騒動記』は当時の世相を反映させた創作ではあるまいか」との説得力ある説が有力になっている。

二十一世紀の郷土史研究によって、武州一揆、高麗郡一橋一揆などの疑問点が一つ一つ解明されることを願って。

Q子ちゃんとAおじさんの飯能の歴史おもしろ問答（その2）

中世飯能武士の誕生とその活躍

▼Q子ちゃん…前回は飯能周辺の歴史が約千三百年前の古代「高麗郡」創設から始まったと言ったけど、今日のお話は、その後の飯能の歴史なのね。

▼Aおじさん…そう、今日は鎌倉時代からの　飯能武士団の活躍について話をしようと思う。

▼Q子…「武士」というのはどうして現れたのかしら。

Aおじさん…そこが大事な点なんだよ。鎌倉時代のはじめに突然武士団が現れたわけではなく、平安時代に貴族社会を守る任務を帯びて皇族貴族の子弟が源氏や平氏の姓を与えられ、武士として各地に点在した。この源平武士団が生え抜きの武士集団を支配し、武士団は巨大勢力に成長、やがて貴族に代わって武家政治が行われるようになったというわけだ。

▼Q子…武士というのはそうして出来たのね。すると飯能の武

（3ページ下段へ）

吾野村の郡域復旧
（こぼればなし）
金子仙太郎

吾野村の郡域復旧については、史実を追って、その大要は飯能市史に、詳細は資料編Ⅳの行政一に掲載されているので参照されたい。ここでは、請願等の経歴を簡略に、こぼればなしとして大河原常二、大野嘉太郎両氏に焦点をあて郡域復旧の運動に、どのように抱ってきたのか、その足跡をたどってみたい。

大河原常二氏について、吾野公民館に郡域復旧費寄附者記念之碑がある。題額は粕谷義三、表題は大河原常二書と記してあるので坂石町分の大河原宅を訪ねた。当主（順平九四歳＝常二の孫）が居られ早速一枚の写真を出された。大河原常二、大野嘉太郎両氏が正装で郡域変更陳情書を携えた記念写真である。共に立派な髭を蓄え血気盛んな様が溢ている。

次に半折の横額二枚出された。一枚は、大正十年夏日　竹堂書（粕谷義三の雅号）の落款があった。陳情当時は衆議院副議長で翌年より議長を務めている。当主の話では、「常二は長男であったが、家業より政治が好きで粕谷義三のもと秘書的役割を担い片腕として政治活動に没頭した。」ということであった。

もう一枚は、内閣総理大臣原敬の落款があった。これも当時交流があったことを物語っているのではなかろうか。

次に大野嘉太郎氏について。終戦間もない頃、勤め先に大野嘉太郎翁が唐草模様の風呂敷を背に杖をついて訪ねてきた。白髪で顔中見事なひげを蓄え、書を広げ静かな口調で説明をした。帰り際「あなたは、同郷の好誼、これを・・・。」と云って二枚（一双）の書を頂戴した。皆目見当もつかず箪笥の隅に眠ること四十数年。退職後出してみると吾野村の郡域復旧当事を偲んで認めたものとわかった。その大要は、△大正五年木炭制度が生産者に不利であったことが運動の引き金の一つになった。△東京弘道館に事務所を設け国会議員の訪問などを行った。△貴族院議長公爵近衛文麿邸へは山岡子爵の案内で伺い、共々民意上聞をご指導頂いた。△運動は大正六年に始まり愁眉を開いたのは同九年であった。△運動解決後、北川都津路の山頂にあった松を、多勢で荷車に積んで近衛邸まで運び献上した。等々当事を偲ぶものである。

私は掛軸に仕立て所持しているが、これと同じ内容で全紙四曲屏風に仕立てたものが、金子組（坂石の金子堅造氏宅）にある両氏共に長男であるが家業より政治活動に奔走したり説教節や書等々多趣味に生きた人であったという。後裔や近隣の人々の風評は様々だが、「その時歴史は動いた」郡域変更の一翼を担って活躍した一人としてあげてよいのではなかろうか。

（大河原常二、大野嘉太郎両氏）

（大野嘉太郎書）

◎郡域変更請願等の経歴

霊亀二年（七一六）高麗郡設置
元禄三年（一六九八）高麗郡より秩父郡に編入
明治十一年（一八七八）庁設置
明治十三年（一八八〇）郡域変の請願県令で脚下
明治二十二年（一八八九）吾野村誕生
明治二十五年（一八九二）衆議院に清水代議士を介して請願脚下
明治三十五年（一九一八）郡域変更陳情書提出
大正十年（一九二一）請願は両院の採択するところとなり吾野、名栗両村は入間郡に編入

◎事務局変更のお知らせ

平成十三年度より会費等すべての連絡事項は事務局　岸　道生までお願いいたします

〒三五七－〇一二一
飯能市中藤上郷四－三
岸　道生方（破草鞋窯）
電話　七七－〇六五四

郵便振替口座
00510-5-48998

（2ページより）

士は源・平どちらなの。それとも地元武士だったの。

▼Aおじさん…話はいよいよ飯能の武士に移るわけだが、飯能の武士は源平どちらとも直系ではない。かといって地方生え抜き武士でもなかった（青木氏文書）。Q子ちゃんは「武蔵七党」という言葉をきいたことある？。

▼Q子…聞いたことない。

▼Aおじさん…そうだろうね。実は平安、鎌倉時代に関東地方で活躍した武士集団に村山党とか児玉党、丹党とかいう七つの武士集団があった。それらを指して一般に武蔵七党といっている。飯能の主な武士団はこのうちの丹党だったんだ。平安末期ころは平氏の配下だったが、源頼朝の挙兵により源氏に味方し、鎌倉幕府の成立に貢献したと伝えられている（『源平盛衰記』）。そこでもう少し詳しく話をしてみよう。

●丹党飯能武士の誕生と足跡

▼Aおじさん…平安時代の末期のこと、秩父平氏の係累にあった丹党秩父基房の子、秩父五郎経家（つねいえ）は命を受けて高麗郡内に館を構え飯能地方の守護役についた。経家は姓を「高麗」と名乗った。そして長男の太郎実家と二男家季を加治剛に住まわせ「加治」姓を、四男基

（4ページ下段へ）

小瀬戸郷土史考

野口正元

○小瀬戸と岡部氏

小瀬戸は名栗川ぞい約二キロの部落で、東部（久留生）と西部（野口、新寺）に分けられる。

東部は岡部六弥太の子孫が住んでいた地域、西部は青梅に城があった三田氏管轄の北限と思われる地域である。

○新寺原の薬浄院墓地跡から徳治年号の板碑が出ているがこれは神風が吹いて元の大軍を破った一二八一（弘安四年）から約二十五年後で、この頃からこの地域には、かなりの有力者が住んでいたと思われる。

○岡部の系譜（寛政重修諸家譜）参照憲澄が吾野神社に棟札を上げた同じ年に、施主　は判らないが、多分岡部のものであろう、小瀬戸の岡部の墓地にも板碑が上がっている。

○小瀬戸の名付け親は岡部氏だろう。屋敷跡が現在の第二小学校になっているのだが、この付近は大字小瀬戸の内の小字小瀬戸だからである。

○風土記稿では、小瀬戸に土着したのは、岡部小右衛門となっているので、忠吉の子吉正（通称小右衛門）のことと思われるが、吉正が小瀬戸に土着した所へ、日影剛に篭居していた親の忠吉が移り住んだとも、親子一緒に小瀬戸に移ったとも考えられる。

しかし吉正は次のように多忙で、小瀬戸には居着かなかったと思われる。

○寛政重修諸家譜の岡部吉正の頃

初忠正　小次郎　小右衛門

母は越前守某が女

松田康秀に仕う。天正十八年小田原篭城のとき、康英叛して奇手を城中に引き入れんとす。其事あらわれて康秀は本城にまねかれ禁獄せらる。吉正等これを聞いてひそかに数多の門を越えてその所に至り、康秀が死期をみんとす。やがて氏直より検使として岡野江雪、笠原越前守来りて、康秀自殺のとき吉正これを介錯してのち、其屍をおさめ高野山に登る。

文禄元年朝鮮の役に、東照宮肥前国名護屋に御進発あり。このとき岡部江雪を召して松田康秀が自殺のさまをきこしめさるるにより、具に吉正が忠志を言上せしかば、御感ありて吉正を召さる。

二年二月高野山を出て名護屋の御陣営にまいりて拝謁し、これより仕え奉り、御帰陣のときも供奉に列す。のち武蔵国都筑郡の内において采地二百石を賜う。慶長五年上杉景勝御征伐のとき供奉して下野国小山にいたり、また関ヶ原の役にも従い奉る。十九年大坂御陣のとき従い奉り、元和元年再陣のときも供奉し、五月七日真田左右衛門幸村が陣にむかい衆に抽んで戦いを励ます。寛永二年与力ならびに鉄砲の者をあずけられ、また衣布を着する事をゆるさる。九月二日采地の御朱印を賜い、のち新恩あり。九年六月二十五日与力五騎を預けらる。十年十二月二十七日五百石の加増あり、すべて千五百石余を知行す。正保四年八月二十五日死す。年七十五。法名壽泉。武蔵国高麗郡直竹村の長光寺に葬る。妻は土屋三郎右衛門昌吉が女。

このように吉正は東奔西走、しかも異常な出世をとげたので、小瀬戸の住居位は立派になり、下働きの家臣もいただろうけれども、本人は此処に居住することなく、管理を弟や家臣に任せたとも考えられ、その後の家譜をみても小瀬戸に住んだ人物が岡部の中にいたのかどうか明らかではない。大方は江戸住まいだろうから、町田市右衛門が家守（兼留守居役）として出てきたのも納得できる。

○抱地についても関心が薄くなったか、須田日記によると須田次兵衛は、吉正の末弟、正次から、また忠勝・忠春からも畑を永代ゆずり受けている。

この須田一族は、武田の落武者だという説と、天正十八年八王子城の落城のとき、城の明け渡しをやった須田右衛門一族が武士を捨てて小瀬戸に土着したのだという説があるが判ってはいない。須田武寿氏の墓には、天正十九年という自然石の墓があるが、小田原落城の時期と一致していて興味深い。

○家守のこと（地主のために地代、店賃の徴収等今の差配人に相当する）

日影郷から町田市右衛門が来て勤めていたが、死去したので後任を村役人に相談された。そこで名主と組頭は、若いが市右衛門の倅寅之助（後に市右衛門を襲名）を推挙し、名主が後見人を仰せ付けられた。ところが長じて帯刀を許されると、奢り高ぶって村役人の言う事をきかず、村では困り切っている。是非家守をやめさせて貰いたいという訴状が役人に出されている。しかし相手は武家屋敷のこと、これは取り上げてはもらえなかったと思われる。市右衛門の没後、町田家からの寄進で久須美の東光寺の七観音と坊ヶ谷戸の西光寺の六地蔵にそれぞれ一体の仏像があがっている。

○小瀬戸の最西端野口家のこと

（3ページより）

兼は飯能に住まわせ「判乃」姓を、六男盛直は原市場の赤沢に住まわせ「赤沢」姓を、七男盛泰は名栗に住まわせ「名栗」姓を。その後、加治氏の子孫が中山に移り住み「中山」姓を名乗らせたんだよ。

▼Q子…へえー、大昔はすんだその地名を氏にしたのね。今は私たち、どこえ住もうが名字はかわらないけどね。

▼Aおじさん…そう、そのあたりが面白い。なかには姓を二度も三度も変えた武士もいるんだ。

▼Q子…で、そのあとどうなったのかしら？

Aおじさん…飯能地方に点在した丹党武士はその多くが板東八平氏と武蔵七党と歩調を合わせ頼朝の平家追討に加わり、鎌倉幕府成立のために働いた（源平盛衰記・吾妻鏡）が、そのほとんどが一代か二代で滅亡してしまったんだ。ただ中山氏だけが後々まで繁栄、江戸時代には大名二家を排出している。飯能のような小さな一山村から二家も大名になるなんて、全国的にも珍しいとおもうね。

▼Q子…大名というのは、お城を持っている殿様のことでしょ。すごいね、二家だなんて。でも飯能から殿様が出たという話、聴いたことないし、第一飯能にお城なかったんでしょ。

▼Aおじさん…Q子ちゃんがい

（5ページ下段へ）

地名が先か家名が先か判らないが、この付近は三田城管轄の北限で、吾野と小瀬戸間の通路としては、長尾坂（現在の東峠）が使われていたと思うが、その出入り口に野口氏が配置されていたと考えられる。山の傾斜地で農業には不向きな場所である。清戸三衆の中に野口刑部丞の名があるが、それが野口家の先祖だというが確証はない。

寛文八年に深谷喜右衛門が検地しているが、その案内役を野口忠右衛門その他でやっているが、名主とは記載してないが村役人だったことは間違いなく、貞享年代名主を長男元重に譲って、自分は後妻と幼児（後の忠左衛門）をつれて隠居した。

更にその元重も宝永七年長子平兵衛に家督（名主供役）を譲って隠居したが、平兵衛は力量はあったが若かったのと、東部の下組としては西端の名主では不便だったので、名主二人制を願い出た。その上で平兵衛の叔父にあたる忠左衛門が名主の後見役をすることになった。

○忠左衛門は観音様を信仰していて、享保元年には観音堂（本尊十一面観音・天笠慶司作）を建立しているし、同五年には伊勢参宮の帰途大坂から子育観音を購入して来て、浅間社にまつり込みお産、育児の神様として土地の人々の信仰心を盛り立てている。

（伝説では、伊勢参りは名主と岡部氏と薬浄院僧侶の三人だと言うが、名主も岡部もそんな暇はなかったろうから名主とは忠左衛門で岡部とは市右衛門だと思われる）

忠左衛門は享保七年には自宅の裏山と観音堂の裏へ、「**宝篋印塔**」を建てている（中に銅板ダラニ経＝飯能文化財に指定）

忠左衛門の家内は子供を二人続けて死亡させたせいか観世音を信仰し、享保六年から約八年間毎月**観音経普門品二十四**を達筆の仮名で写経し、観音堂へ奉納している。このように忠左衛門の行動は派手で、金使いもあらかったようで、享保九年には名主の後見役をやめさせてくれと甥の平兵衛から訴状が出ている。

○薩摩芋の件

享保十五年には日野小左衛門の役所から薩摩芋を作るよう言われたが、枝葉ばかりで実がならないと断っている。漆木についてもお尋ねだが、一切御座なく、植え付ける場所もありません。桑についてはお年貢の助けになるよう植えてあるが、新規には場所がありませんと断っている。これは名主平兵衛と小岩井村組頭市郎左衛門との連名である。

○天保の改革

名主伊右衛門の不正に対し天保十三年、百姓十八人が出訴し、名主病弱を名目に、同十四年新たに五人の組頭を選んで年番名主制とし、第一代目を須田熊太郎（精道の父）が勤めている。

○安藤直右衛門について。

直右衛門は大工の棟梁で、高山の不動尊の堂宇を建立したのでも有名であるが、天保十四年の改革によって、五人の名主候補の一人となり、安政年代に入って名主となった。親の代から川越藩に出入りし、豪放石落の気象から、家老などとも話す機会があったとみえ、新政府の情報をいちはやくつかめる立分離令を三年も前に察知、村の場にあった。したがって、神仏鎮守、浅間社の本尊を隠匿しようと考えた。今まで新寺入りの山中にあった社はかなりいたんでもいたので、元治元年、日向の自分の山に本殿兼拝殿を新築し、祭典の時といえども本尊を拝することが出来ないようにした。更に翌慶応元年には、祭典のとき建てる「大幟」も「奉納子安浅間大士」だったのを「奉献子安浅間御宝前」に改め、書を川越藩の重鎮、儒学者戸井田研斎にお願いした。

この「大幟」は長さが十メートルあり、毎年祭典のとき異彩をはなったが、大き過ぎて昭和四十八年に立て替えられ現在に至っている。

○小学校創立

学制発布により、明治六年十二月六日、小瀬戸村は久須美村と共同で、久須美の東光寺に小学校を創立した。

しかし東に偏在しているのと、仏事が有ると休校しなければならなかったので、空き家になっていた小瀬戸の岡部の宅地に、十一年四月十二日移転した。

○町村制実施により明治二十二年四月一日小瀬戸村は久須美村、小岩井村と共に飯能町に合併、大字小瀬戸となって村としての業務は終了した。

会員募集

飯能郷土史研究会では会員を募集しています
お問い合わせは、役員または事務局へ
岸　道生方（破草鞋窯）
電話　七七―〇六五四

◎新入会員

渡辺久芳（入間市新光）
新井五助（飯能市中山）
岡部映汎（飯能市川寺
井上　晃（飯能市南町）

よろしくお願いいたします。

（4ページより）

うとおり大名というのは一万石の城持ち領主をいうんだ。しかし飯能には砦や館クラスのものはあったが、いわゆる城と言えるような大規模のはなかった。ではなぜ、大名が誕生したのか、そのあたりをもう少し詳しく話そう。

●家康に見出され

飯能武士が大名に

▼Aおじさん…飯能の丹党武士諸族は鎌倉時代にはほとんどが滅亡したことは、さっき話したとおりだが、それから約四百年、鎌倉幕府を倒して成立した足利室町幕府も力を失い、世は戦国時代を迎える。暗殺された織田信長の後を受け継いだ豊臣秀吉が天下を統一するが、その仕上げの段階で征伐しなければならなかったのが小田原の北条氏。そのころ八王子城も北条一門の城だったが、そこに秀吉麾下の徳川家康軍と前田利家軍の大軍が攻め込む。このとき八王子城の城主北条照守は親城の小田原城へ詰めており、城主不在を守って戦ったのが家老の中山家範（いえのり）だった。家範は高麗五郎経家を祖とする飯能中山出の丹党武士だったが、大軍を向こうにまわしての戦いぶりは敵方も認める見事さ。秀吉軍の降伏勧告にも応じず、最後は討ち死にしてしまう。落城後は家康は「あっぱれ武士の鏡な

（6ページ下段へ）

郷土の鉄道史
飯能地方 鉄道開設の頃

新井五助

「汽笛一声新橋を」の鉄道唱歌（大和田建樹作詞）発行は明治三十三年の事、東海道編に続いて全国各駅を詠み込むなど大ヒットとなるのだが、その発端、東京・横浜開通は明治四年であった。埼玉県下での鉄道は明治十五年上野・熊谷間が第一号更に甲武鉄道に繋がる川越鉄道が二番手となった。飯能町に汽笛がなり響くのは明治も過ぎ大正になっての事だった。

今、当事の鉄道草創期の社会事情、開設の経緯を振り返り地代の流れを眺めて見るのも有意義なこと、又興味深いものがある。

一、日本初の鉄道、東京横浜間の開通

明治五年十月十四日（新暦）古式ゆかしい烏帽子、直垂姿の天皇は、英国献上のお召し馬車より菊の紋鮮やかな幔幕をめぐらしたホームに到着、開通式が行われた。祝砲轟く中出発合図の太鼓が打ち鳴らされ定刻十時、見守る大観衆に送られて列車は横浜へ向かったという。当時の報道によれば「疾き事風の如く雲の如く」の陸蒸気の様が想像される。将に文明開化の魁欧米に追いつけ追い越せの顕れであったろう。東西の京を中心とした官設鉄道に続いて地方有力者をも含めた半官半民性格の私設鉄道は北海道を含めた全国を網羅し鉄道の大動脈が形成されていった。輸出商品の花形、絹と生糸は日本鉄道によって、上、信及び東北地方から横浜へ集められるため上野・熊谷間の開通が先ず急がれ明治十六年、県下第一号の鉄道となり、そして二番目となるのが川越鉄道である。

二、川越鉄道の開設

甲州及び中央資本によって既に新宿・八王子間の甲武鉄道の支線的性格をもって、多摩、入間、高麗、比企、秩父の横のライン交通の計画が国分寺、所沢を経由する川越鉄道として明治二十八年全通した。（この間の事情は県史や所沢及び近隣市史や資料編に詳しい）

①敷設出願、明治二十三年

②発起人、増田忠順（柏原村）以下三十九人。その内訳は、東京市五・所沢町十・入間川村十六・飯能町一・柏原、水富、田面沢村各二・入間村一となっており川越町民の名はない。

③資本金二十五万五千円

ここで注目したいのは、川越有力者が入っていない事、その上に川越町名で反対声明がだされている事であろう。江戸に直結したこの地は物資の集散地として又新河岸舟運の処点であり既存の権益を奪われかねない鉄道建設は容認できなかったのであろう事が窺われる。開通式は日清戦争勝利と併せて凱旋門と呼ばれる大看板が立ち主賓の千家尊福埼玉県知事（飯能生まれの千代夫人の縁で当地方ゆかりの詩人元鹿の父君）は、春季皇霊祭のよき日に戦勝を祝すと共に今後県西部地方と東京の交易は益々盛んになるだろうと祝福したという。この開通により襲来数十時間かかった東京への旅は一挙に三時間程に縮まったのである。

三、武蔵野鉄道の開通

第二次の鉄道ブームは全国で四百数十県件の免許出願を見たが飯能地方で地元は元より出身有力者と関連沿線有志の要望により当時の巣鴨村へ直結の計画が申請され実現されるに至った。

①、商号武蔵野軽便鉄道株式会社

②、資本金百万円

③、発起人、（平沼専蔵他七十四名）株主を地域別に見ると次のようになる。

横浜　三、2、飯能　十、4
東京　二十、3、豊岡　七、3
府下　四、5、東吾野三、
所沢二十三、2、吾野三、1
名栗　2、加治　二、1
島根県　1、
（上段発起人、下段二百株以上の株主）

開通式は大正四年四月十八日行われたが、この開通によって僅か二時間で池袋と結ばれる事になり一日七往復、従来の舟運もとより馬車鉄道、川越鉄道乗り継ぎ時代とは比較にならない便利さが到来した訳であった。

四、おわりに

所沢は日本初の飛行場、当地方もその関連施設が多かったがその資料まとめも充分でない。久下分村小山源三郎（空飛ぶ機械を考案）、河野長敏大佐（初代気球隊長であり所沢実業初代校長）、吉原清治飛行士（報知機でベルリン・東京単独飛行、奥武蔵スキー場でグライダー飛翔）、隣村、都幾川村の岩田正夫飛行士（昭和三年三重県沖で殉職死亡）の方々についてご存知の先輩方のご教導を望みます。

（尚文中敬称省略）

（5ページより）

この話を聞いり。その子供たちもさぞかし武士（もののふ）魂をもって育てられているに違いない」と家来に命じ家範の子供たちを探させた。そして八王子在に隠棲していたとみられる家範の子、助六郎照守（二十一歳）と菊太郎信吉（十五歳）兄弟が探し出され、小姓として召し抱えられ、旗本になる。

▼Q子…わかった、その二人が成人して家康に認められ、殿様になったんでしょう。

▼Aおじさん…そのとおりだ。ただ二人がすぐ大名になったわけではなく、兄の照守は関ヶ原の戦いで功績が認められ、二代将軍秀忠の下で三千石の大身旗本奉行に取り立てられる。のち文字通り大名に取り立てられるのは三代後。中山直張の子、直邦が母方の黒田信濃守直相に育てられて黒田氏を名乗った。そしてその聡明さが認められ、直邦三十歳で小なりといえども下館藩一万五千石の大名となり、さらに上州沼田城主として三万石を拝領、直張二代の直純（なおずみ）は千葉の久留里藩三万石の城主となって君津市周辺や飯能村などを領し徳川に尽くした。こうして黒田氏は久留里城主として明治維新までその地位を守ったんだ（『徳川十記』）。黒田氏は代々の藩主が亡くなると本城は千葉にあったのだけど

（7ページ下段へ）

随筆 輝いた鳥居

大野悦子

わが自治会（飯能市南自治会）の天神様は小高い山の中腹にチョコンと祀られている。四月二十九日が祭日で、催しものはないが、七十戸の氏子が神前に集まって神主さんが祝詞をあげる。この季節は新緑の一番美しいときなので、さまざまな色に芽ぶいた木々の、花より勝る眺めのなかで、のりとをしみじみと聞いていると心が洗われる思いがする。私はこの祭りの雰囲気をいつも楽しみにしている。

山裾を通って神社へいく二百メートルのでこぼこした参道をなんとか改修したいと長い念願であったが、なかなか皆の意見がまとまらないでいた。

自治会長の夫はいろいろと思案していたようだったが、市へ申請をしてナマコンを貰い、皆んなで作業をして経費を最低線に押さえてなんとかこれは出来上がった。

参道が新しく出来てみると鳥居が倒れそうになっているのに気が付いた。このまま見逃すわけにはいかなくなった。

最初は、わが家の山の木を寄贈してと思っていたが、氏子の神様の事なので皆が少しづつ寄付をすれば半永久的な、御影石製のものが出来るのではと自主的にお金が集まった。思っていたより多く五十二万円の寄付金になった。地元の神主さんにも何かと相談にのってもらっているうちに、鳥居の中央に「天神社」と額に書くのを、秩父神社の宮司さんにでもお願いしてみてはと勧められたので、打診してもらったら「今、お忙しそうでとても今年中には書いてもらえそうにない」との事だった。聞いてはみなかったが、かんじんの揮毫料がどれくらいなものなのか見当がつかないでいた。

あれやこれやしているうちに夫は「いっそのこと本家本元、九州太宰府の天満宮へお願いしてみよう」と言いだした。「まさか見も知らない、こんな所へ書いてくれないでしょう」と私は一笑に付した。「不可能はない」と言うほど社長から仕込まれて猛烈社員だった夫は、退職してもまだその余力があるらしく、その晩から何回も太宰府へ長い交渉の電話をしていたようだった。「一応そちらの天神様の社歴と申請書を出すように」と言われたので感触ありと希望をもった。

それから分厚い「埼玉の神社」というほんを持ち出してきてその作業に取りかかった。小さな小さな、貧しい氏子なのでその旨、宜しくお願いしますと丁重に手紙をしたためた。

ダメモトとは思いながらも、その後は郵便受けと睨めっこの毎日であった。待つこと一週間、遂に太宰府天満宮、西高辻信良宮司直筆の「天神社」なる書が送られてきた。おもわず「やったーバンザーイ」である。

問題は揮毫料だ。「そちらの熱意にほだされて書いただけ」と何度伺ってもいわれなかった。そうは言われても誠意に答えなければと夫は後日九州へ飛ぶことになっている。

突貫工事をしてもらい平成十二年十一月二十六日、恒例になった芋煮会が参道と鳥居のお祝いも兼ねて直らいの会になった。

神主さんが挨拶のなかで「太宰府天満宮は私達宮司からみれば、格の高い雲上の神社です。やすやすお願いすることも出来なければ、そんな発想も及ばないことなのに、それを実現した大野さんには脱帽です」と言われた。その世界を知らない素人の恐ろしさであろうが、夫はこの三か月間この事にかかりっきりだったから、完成した今日の乾杯のビールはさぞ美味しい事だろう。

初冬の澄みきった空と、杉山に点在する紅葉もいちだんと美しく輝いて鳥居と額をひきたてていた。

写真が語る 黒田直邦像

「能仁寺蔵」

飯能丹党、中山籐兵衛直張の三男、直邦は母方の館林藩家老黒田氏に養育され、成長後も「黒田」姓を名乗った。神田の館に住み、五代将軍綱吉の子、徳松君に近侍して出世、上州沼田藩三万石の大名となり、子孫が久留里藩主になる基礎を築いた。直邦の墓は天覧山の西北、多峰主山の中腹にある。（市指定文化財）

（6ページより）

墓は先祖の地、飯能の菩提寺能仁寺に埋葬した。今この歴代の墓は飯能の文化財として大切に守られている。

▼Q子…で、照守の弟信吉の方はどうなったの。

▼Aおじさん…信吉も家康の信任が厚く、水戸徳川藩の筆頭付け家老となり、「黄門様」としてテレビドラマでも知られる水戸光圀の藩主実現に奔走したと伝えられている。やがてその子供たちが松岡藩（茨城県高萩市）三万石の藩主となり、水戸藩の筆頭家老であると同時に松岡城主でもあるという特異な立場となり、やはり明治維新までその役割を果たしている。初代信吉の墓は中山氏の菩提寺智観寺にあり、埼玉県の文化財に指定されているんだよ。

▼Q子…結局、飯能の丹党武士二家が茨城県の松岡藩と千葉県の久留里藩の二つの城主になったというわけなのね。郷土武士の活躍、よくわかったわ。また機会をみて、他の飯能の歴史を教えてね。Aおじさん、ありがとう。

〔文責・吉田靖〕

新年度事業計画
郷土史研だより

昨年より隔月の例会を「郷土を知る」というテーマで開催し各地域の歴史にふれようということからはじまりました。

本年も引き続き、各会員の研究発表や体験報告を中心に活動していきます。ふるってご参加ください。会員外の人にも声をかけご参加お願いします。

◎平成十三年度 事業計画（案）

▽総会　四月二十二日（日）

「祭と民俗」講演会
―地口行灯（じぐちあんどん）の話―

講師　郷土芸能研究家
石川　博司氏
（青梅市在住）

今回の講演会は、郷土史研、郷土館、郷土館友の会の共催で一般の方々にも参加していただけるよう、広報はんのうに掲載していただき開催いたしました。

▽例会（隔月土曜日を予定）

○六月「伊勢道中参宮日記簿」
講師　増岡正文氏

○八月「名字と地名」
講師　青木晃平氏

○十月「黒田氏と飯能」
講師　浅見徳男氏

○十二月「絵馬の復元制作から―」
講師　岡野達雄氏

○二月「天明三年一橋領一揆」
講師　吉田　靖氏

講師、テーマについては、変更ある場合もあります。会員には事前にお知らせします。

◎平成十二年度 事業報告

▽総会四月二十三日（日）

講演会「飯能地方の近現代…新資料をもとにして…」
講師　駿河台大学
文化情報学部教授
広瀬順皓氏

▽例会

○六月　六月十七日（土）
『郷土を知る①』「喜多川神社の獅子舞について」「郡域変更のいきさつ」
講師　金子仙太郎氏

○八月　八月二十六日（土）
『郷土を知る②』「原市場の板碑について」「原市場の神仏分離について」
講師　西村一男氏

○十月　十月二十八日（土）
『郷土を知る③』「吾野村南を中心にして…子の権現・竹寺・吾野神社・御霊神社について…」
講師　大野邦弘氏

○十二月　十二月九日（土）
『郷土を知る④』「飯能地域の鉄道開設について…川越鉄道と武蔵野鉄道…」
講師　新井五助氏

終了後忘年会

○二月　二月二十四日（土）
『郷土を知る⑤』「飯能人物史（1）奇人変人編」
講師　吉田　靖氏

○役員会　平成十三年三月二十　二日、十二年度の事業報告、新年度の事業計画を検討する。

郷土館だより
13年度の催し物（予定）

【展示】

◆収蔵品展「郷土館で絵を愉しむ」
4月28日～5月27日

◆定点撮影プロジェクト2001展
実施時期は未定です

◆中学生社会科研究展
9月

◆特別展「飯能焼とその周辺」（仮称）
10月中旬～11月下旬

【講演会など】

◎織物関係連続講演会
6月～7月

◎夏休み親子歴史教室
8月上旬

◎中世の史跡めぐり
11月を予定しています

◎特別展関連体験学習会・講演会
頓別展開催期間中

◎市民学芸員養成講座
1月下旬～3月下旬

◎鎧に関する講演会
3月

※詳しくは、事前のポスター、ちらし、「広報はんのう」等で確認下さい。

☆登録博物館になりました。

昨年3月6日付で、郷土館は博物館法に規定される博物館として登録されました。この登録については、日頃の郷土館活動が博物館法の基準を満たしていると認められたものです。

☆昨年11月に埼玉県教育委員会より「優良教育施設」として表彰を受けました。

「定点撮影プロジェクト」や「市民学芸員養成事業」など市民参加型の活動が認められ、地域文化の向上に寄与しているとして表彰されたものです。

あとがき

読者のみなさん、表紙のタイトルをご覧ください。「第21号」とあるでしょう。そう、本誌は誌数を重ねること二十一号となりました。時あたかも二十一世紀初年、号数と世紀はなんの関係もないとはいえ、編者にとっては何か心に響くものを禁じ得ません◆歴史の研究者にとっての二十一世紀は、研究への制約、マインドコントロールによる先入観など、数々の障害があり「真実」への探求が難しい時代だったように思います。二十一世紀はそうした障害もその多くが払拭され、古代、中世、近世ばかりでなく、二十世紀の歴史認識についても正しい方向へと流れが変わるのではないでしょうか。人類万民のために、そうなることを期待して……

（清流子）

郷土はんのう　第21号
発行日
平成十三年三月三十一日
発行所　飯能郷土史研究会
飯能市中藤上郷四―三
岸　道生方
（〒三五七―〇一二一）
（電話七七―〇六五四）
題字　大野邦弘
表紙写真　金子仙太郎